

# 町長

## ひとりごと

(96)

齊藤

譲



南条小学校の校長室に、

「この子らを光に」という扁額がかかっている。

これはいまは亡き光町出身の山崎徳堂先生が書かれたものである。私は学

校訪問の度に、この書に魅入る。かつて教育出張

所の所長がお見えになった時、この書を見て激賞

されたと校長から聞いたことがある。書のうまさ

もさることながら、ふつうでは「この子らに光を」と書きたいところである

が、これでは、単に子どもたちに外から光を与えよ

うという何の変哲もないありきたりの呼びかけに

すぎない。しかし、「を」と「に」の二文字を扁額の

ように入れ替えると、このやさしい言葉がぐっと

引きしまり、子どもに対して強い願いと期待、そ

して責任感が伝わってく

る。ひとり一人の子ともが、萎縮することなく存在感のある光り輝く人間に成長して欲しい、またそうしなければならぬと強く訴えているのである。

そのためには、子ども自らの努力と、家庭や社会、特に校長以下教師の情熱ある教育をと呼びかけているように私には思える。この

扁額を見ると、教育に対する新たな感動と決意が胸奥から湧きあがってくる。

光となった子ども達が、やがてこのふる里を背負って立ち、光り輝く町を建設していつてくれたらどんなに素晴らしいことであろうか。

考えただけでも心が躍る。私は町づくりの最大、最高の目標はここにあると思っ

ている。

▼昨年十一月下旬から十二月初旬にかけて、町内各小

中学校を教育委員の皆さん

と共に訪問した。町長に就任以来続く年一回の学校訪問である。どの学校、クラスも熱の入った授業が展開されてお

り、一目で学校教育が充実していることがわかる。特に、中学校で音楽の時間、男子生徒が大きな声で歌う姿、目を輝かせてコンピュ

ターを操作している姿、英語講師ダニエル・ホーバス先生と英会話をする緊張した姿、どれもこれも私には新鮮で、成長しつつある子ども達がまさに光になろうとしている瞬間のように思えた。これはどれくらいいいことはない。聞けば、どの小中学校にも長期欠席する児童・生徒は

### この子らを光に



一人もいないという。また、問題行動をおこす生徒もななくたいへん落ち着いた状況にあると各校長は口を揃えて語る。だからといって気を抜くことはできないとも付け加える。かつてある中学校長が退任後、こう語ったことがある。

「在職中は、一日たりとも気の休まる日はありません。一人もいないという。また、問題行動をおこす生徒もななくたいへん落ち着いた状況にあると各校長は口を揃えて語る。だからといって気を抜くことはできないとも付け加える。かつてある中学校長が退任後、こう語ったことがある。」

の思いこそが、子どもを守り、育てていく最も大切な原動力であることは間違いない。教師の皆さんの一層の精進努力を期待したい。また当然のことながら父兄の皆さんにはこのことを理解し、自らが果さなければならぬしつけや、家庭教育を責任をもって行なって欲しい。学校教育の成果は、しっかりとした家庭教育の基礎のうえに花開くことを忘れてはならないと思う。

▼愛知県で発生したいじめによる中学生の自殺事件は、マスコミによって大きな社会問題となり、文部省をはじめ教育関係者の間に衝撃が走り、いまでも余波が続いている。事件の内容は新聞紙上などで知る限りであるが、あまりにも陰湿で悪質ないじめの実態には、語る言葉が失う。いじめに加わった生徒達は、こんなにも恐ろしい心をたかだか十数年の人生の中で、いつ、どうして宿してしまったのであろうか。自殺に追い込まれた少年の心中を思えば、まことに哀れであり悲しい。

被害者にしろ加害者にしろ、何せこんな結末を迎える前に対策を打てなかったのだろうか。いまマスコミをはじめ世論は、一斉に学校側の非を責めたてている。たしかにいじめの現場は学校であり、またその結果からみても学校当局の踏みこんだ指導が欠如していたことは否めず、その責任は重大だと言わざるを得ない。たとえそれが学校や担任の名譽を傷つけることになったとしても、病根を抉り出し、手当てして快方させることが教育の原点ではあるまいか。一方亡くなった少年の家庭にしても、少年が事実を親に語れなかったことや、親も真実を語るまで少年の心の中に踏み込まなかったことに、学校と同様な問題があったのではないかと感ずるのは私一人であらうか。子どもは、家庭や学校だけではなく社会全体のものだ。この事件を、他山の石としなければならない。